小田原俳句協会報

理事会だより（1・12）

一、新年にあたり池田会長より、今年は梅、桜、秋季各俳句大会の第二部までの実施を目指し会員の協力をお願いしたい、との挨拶があった。
二、梅まつり俳句大会第二部実施を全員一致で決定し、当日のコロナ感染対応につき特に検温の徹底を図ることになった。
三、立春句会、梅まつりの当日の流れを説明（事業部長）。梅まつりの役割分担説明。（総務部長）
四、桜まつり俳句大会投句案内を各グループへ配布
五、十二月入会の新会員の紹介：武居裕美子さん、松下俊之さん（ともに沈丁）
六、定期総会に向けて会員動向確認要請（総務部）

理事会日程　3／9　4／13　**総会**　4／27
（毎月十五時開催）

「俳句おだわら」10句抄（665号より）

田中幸子　抄出

眠る児のいまは天使よつくつくし　瀬戸　悠
剃刀の頬なめらかに秋の朝　神山つとむ
玉入れは空のポケット運動会　加藤　健治
無駄花のなき律儀さや秋なすび　高橋　小糸
下流へと月の堤の歩を返す　佐宗　欣二
半生を寺に仕えて冬至粥　加藤まり子
駅蕎麦に海老天奢る日短　田下　昌人
行く秋の最上の舟歌風に消ゆ　野川木一路
日記買ふ未知の人生十年分　小林永以子
末枯や物にあふれた独居なり　岡田　典代

寶子山京子　抄出

衣被いくつも食うて聞き役に　二見　和江
晩秋や路地の奥より我が家の灯　和田恵美子
落葉舞う空地無声映画のごと　高橋みどり
いやされる友の笑顔とふかし芋　瀬戸とみ子
下流へと月の堤の歩を返す　佐宗　欣二
かまいたち怖い上司が夢に現れ　村場　十五
日脚伸ぶ背伸びし猫ののびーる影　峯尾ユキエ
もう昔焼こうよ手紙日脚伸ぶ　河本チヨ子
日記買ふ未知の人生十年分　小林永以子
冬凪の波が馴れなれしく寄する　小澤　園子

年間ベスト一句集

城の石垣にも歴史枝垂梅　青木　勝子
足首にＬＯＶＥのタトウや春の街　青木　孝子
二学期の決意表明算数四　青木たけを
ひとところ風のまぶしき麦の秋　青山　典子
病床のベッドの軋み明易し　秋山　昇
道をしゑ天秤一本立志伝　足立　和子
町暑し風呂屋の三時暖簾出す　新井たか志
梅見客おりて電車が軽くなる　池田　忠山
水始めて涸るや地球儀古びたり　池田　令子
隠れ得ぬ思いを色に烏瓜　石井きよ子
採寸や未知の伸び代草青む　石井千代子
日脚伸ぶ丸くなり行く風の角　石井　秀稀
階は龍の如垂直の滝　石田加津子
落葉松の林を抜けて春の駒　板谷　雅泉
天高し庭師の開ける空がある　市川めぐみ
空返事して草を摘む草を摘む　一ノ瀬茂代
春の夢に心を置いてきたやうな　伊藤はる子
立春大吉そろそろ雲と旅に出ん　伊藤　道郎

俳句おだわら（1・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（12・23）　久江報

枯蓮陽の刺す水の黒々と　足立　和子
渋面の七味売りなり歳の市　川本　育子
平穏に卒寿半ばや日向ぼこ　高橋　小糸
行く年の待ち合ひ室の木椅子かな　山﨑　悦子
渓流の水が水押し年詰まる　近藤　久江

◆香雨・梅ごち（12・25）　忠山報

始まりは母の伴奏クリスマス　肥後ちさこ
数へ日や拭きむら残る硝子窓　関戸わよこ
ポインセチア日をいつぱいの診療所　青山　典子
味噌搗（つき）の石の百年語りつぐ　門松　鳳文
薄味に出汁をととのへ大根煮る　吉田　百代
入相の杜へ次々寒烏　吉田　康雄
人並みのしあはせポインセチアの緋　陌間みどり
慰めも励ましもあり聖樹の灯　小澤　純子
並木みな切りつめられて十二月　池田　忠山

◆こよろぎ（1・12）　つとむ報

中継のヘリ軽々旋回駅伝日　板谷　雅泉
流水の音なき音や若菜摘む　植松テル子

何しても妣に似てるや白木槿　井上　和子
柿若葉つやつやつやと透くみどり　井上　良子
蟷螂やガラス戸越しのパントマイム　岩楯恵津子
人類の愚か許さじ原爆忌　岩本ひさみ
托鉢の歩調乱さず花の雨　植松テル子
空っぽになりたくて発つ冬の旅　内田知江子
新涼や銀河鉄道栢山駅　大石　和子
きょうは正面が冬の川になった　大石　雄介
虫喰ひも混じる枝豆味は濃き　大木　敬子
霜柱踏む泉下の吾子を愛おしむ　大佐田うづき
ブレーカー落ちたる部屋の夜寒かな　大沢　年子
志手石をさがす講座や木の実降る　大島美恵子
梅が香に誘ひさそはれ小半日　大塚　行人
「みーつけた」鬼の駆け寄る蕗のとう　岡田　典代
父性とは十六夜の白き灯台　岡本　史郎
紫蘇を揉むこの残生のおきどころ　尾﨑　一夫
十五夜や古典臨書の筆をおく　尾崎　幸子
落ち葉して智恵子の空が戻りけり　尾崎　竹詩
やさしさをときどき忘れ草の花　小澤　純子
朝冷えの血管針を逃げたがる　小澤　園子

湯たんぽに祖母の声聞く寝床かな　神山つとむ

◆春野（12・18）　きよ志報

老いらくの恋を覗きて雪女郎　秋山　昇
微笑みに棘があるかもそぞろ寒　伊藤はる子
ふはり飛ぶ綿虫この世あてもなく　内田知江子
ベルリンの壁の欠片や冬ざるる　尾﨑　一夫
雪蛍行方しらずのわたしです　瀬戸　悠
回覧板着ぶくれから着ぶくれへ　二見　和江
討入りや月も雲間に身を隠す　長谷川きよ志

◆青梅（1・11）　幸子報

門松や家族を守る和のこころ　大塚　行人
孫達のはじける笑顔晦日蕎麦　湯本とし子
あらたかや太鼓高鳴る初不動　加藤まり子
野にひゞく程の嚔や畑仕事　久保寺トミ子
ジョギングや一気に呑み干す寒の水　田渕　令子
健やかを真ん中に据ゑ寒の入　田中　幸子

◆みなみ（12・17）　かほる報

冬田行く人それぞれに過去を負う　豊田　幸枝
煮込むほどおふくろの味おでんかな　斉藤　静
風が肩組んで吹き抜く冬田かな　小瀬村信子
冬すみれ雑木林のがらんどう　加藤　富江

半分の記憶のままで卒業す　小野　菊土
新樹光ショパンの音が響きおり　香川　花子
どう動く平和の二文字春寒し　風間　秀泰
石鹸の泡立ちのよき四月かな　片野　秋子
夏蝶や物憂いときの窓広く　片野　節子
朝顔や好きな事だけする一日　勝木　澄子
山伏と行き交ふ霧の月山よ　加藤　幾代
草に生れ草の貌してきりぎりす　加藤かほる
玉入れは空のポケット運動会　加藤　健治
小春日をゆっくり運ぶ登山線　加藤　富江
行く秋や宇宙の神秘大団円　加藤　春江
半生を寺に仕へて冬至粥　加藤まり子
分け合って病む人と食むマスカット　加藤れい子
新宿をひとり歩きや夏の月　柏木　良花
竹馬を一段上げて別世界　門松　鳳文
青き踏むホップステップ水たまり　神山つとむ
天空に光り漲り初日の出　川合　昌子
十六夜の足裏に草のしめりかな　川本　育子
クリスマス六百円のモンブラン　河本　純子
かほだしたそのままが良い福寿草　河本チヨ子

携帯に老いの不安や冬田道　加藤れい子
残業の父を待ちゐる聖夜かな　加藤　健治
おしゃべりも一緒に加えおでん鍋　市川めぐみ
蓋取るを眼が囲むおでん鍋　加藤かほる

◆実のり（1・13）　たか志報

到来のシクラメン咲く窓辺かな　岩本ひさみ
戦火尚しづかに灯る聖樹かな　杉本　久子
鯛焼と言ひつつ列に歳の市　木村　幸枝
重箱の隅のはなしを女正月　新井たか志

◆山北（12・22）　由里子報

初霜や宅配人の小走りに　和田恵美子
乾通りのシャッターチャンス唐楓　尾崎　幸子
初霜や黒光りする蓄音機　中山　妙子
褶くべて火を喜ばす年男　尾崎　竹詩
コロッケにソースたっぷりちゃんちゃんこ　石田加津子
山茶花やたたむシャツより陽の匂い　竹下由里子

◆おほゐ（1・11）　秀泰報

にぎわいの後の静けさ堀炬燵　中根登美子
久し振り御利益願う初詣　中津川晴江
ろう梅や明日の光を透かしおり　石井きよ子
山眠るあしたのマグマ秘めながら　加藤　春江

長き夜の五体沈めて祈る刻　菅野　英余
冬天を両手で支え太極拳　北村　文江
山笑うその時私は鳥になる　木村　和彦
神々しき一月の富士嬰生まる　木村　幸枝
石跳んで川渡る女春日傘　木村美千代
戦争はよせとひまわり凛と立つ　木村予史重
脇道も裏道も好き薔薇の花　久津間百合子
身になじむ木綿の農良着秋涼し　久保寺トミ子
蛇口よりたましひしたたり落ちてくる　小島ノブヨシ
この庭が好きだと来たる赤とんぼ　小瀬村信子
夜半の秋無性に文字を食べたくて　小林永以子
蕗の薹探す庭下駄後生楽　小林　環
金柑の甘さとろりと祝膳　小宮　早苗
夕されば風が風呼ぶ飛花落花　近藤　久江
幸あれよ東風に吹かるる絵馬二十重　西賀　久實
しやぼん玉太平洋の風にのる　齊藤　桂
雨近し枇杷の匂いのこもる午後　斉藤　静
白梅の白さに勝る香りかな　坂入清四郎
化石展外はヒト科に降る落葉　佐々木重満
花並木タクシー徐行してもらふ　佐宗　欣二

それぞれが芸術家なり年賀状　二上　光子
故里の無人の駅の松飾り　小野　菊土
手繰り寄す昭和佳きこと年の暮　廣田　悦子
風が鳴き身心一如寒に入る　中村　昌男
乗客を抜いて飛び乗る寒気かな　高橋みどり
弁天に言い寄る布袋宝船　横塚　昌平
寒風に追いかけ越され三千歩　香川　花子
唐松に一羽の小鳥寒に入る　坂入清四郎
餅を焼くたぎる血潮の反抗期　石井千代子
森閑の神域を行く初詣　風間　秀泰

◆たけのこ（1・11）　悦女報

初電話しまなみ海道走破すと　三木　泰子
元旦や一ト日ひとつの出来る事　久津間百合子
前向きな言葉列ねし初日記　小宮　早苗
初日の出上手に撮れたと孫笑ふ　徳田　公子
う回する先は大河か色鳥来　宮崎　悦女

◆鷹（1・7）　十五報

聖夜なり研究室のマグカップ　青木　孝子
手際良きおでん種屋や年つまる　池田　令子
蝋涙を見つむる黙や年つまる　西賀　久實
猫探すちらしポストに雪催　佐宗　欣二

新涼や逆上がりの子ニンマリと　佐藤　正子
冬の雨おやすみバンクシー傘の女（ひと）　柴田　礼子
大根の首に着せたしネックウォーマ　清水美代子
子の書きし夢物語クリスマス　下平　美子
羽抜鳥世論調査の電話とる　庄司　下載
山吹や次第に強き滝の音　杉崎　せつ
硝煙の立ち籠む町や夏つばめ　杉本　久子
百年の人生二兎を追ってみる　杉山あけみ
水筒の忘れ物です花の山　須田　聡子
淑気満つ日比谷のビルの日章旗　須田　晴美
父からの一行メール流れ星　関戸わよこ
様々な生と死三寒四温かな　瀬戸　正洋
すらすらと出てこぬ言葉朝曇　瀬戸とみ子
わが肌へ月の光を鞣しをり　瀬戸　悠
水響む峡の朝や座禅草　瀬戸　りん
竹叢の風のうねりや鶏合　芹澤　常子
笑顔にも涙ひとすじ卒業歌　髙井　幸子
雲割つて山の日の出や鷹渡る　高橋久美子
福寿草平穏の日々卒寿かな　高橋　小糸
散髪の鋏の音も春めける　高橋　正子

町川の堰の水音や冬夕焼　須田　晴美
山眠る湖上を滑る遊覧船　中田　笑子
山茶花や民家圧しきし養鶏場　百川　秀子
公民館女ばかりの煤払　山崎美知子
冬ぬくし片手に荷物ひとつ増え　柏木　良花
霜柱旦過の僧を見送れり　庄司　下載
暮れがての空の縹や菊を焚く　瀬戸　りん
飲食も起居もふたり冬の梅　高橋久美子
終電やポインセチアが膝に燃ゆ　中山智津子
寒夕焼空に怒りのあるごとく　齊藤　桂
谷底の一枚岩や冬紅葉　芹澤　常子
冬晴や園児競つて駆けだせり　大木　敬子
クリスマス気障な男の長財布　大島美恵子
どんぶりの縁の雷文熊手市　田下　昌人
数へ日の野の鳥とゐて畑仕事　中根　和子
寒晴や旅の一座に初景滝（しょけいだる）　加藤　幾代
風花や弥生の土器の口細く　守屋　まち
襟立てていひにくきこと言ひ放つ　米山　翠
冬灯髪の黒さの自慢なり　來田　新子
挨拶を交わす隣家や初雀　大沢　年子
どんど待つ公民館の薬缶酒　片野　秋子

寡黙なる山河の息吹春めけり　高橋みどり
少年は寡黙かさりと蟻地獄　瀧本　敦子
ほうたるやコンパスで描く花模様　竹下由里子
一切を預けて冬の手術室　武居裕美子
東とみんなみに海蜜柑山　田下　昌人
向日葵の中に星屑吸ひ込まる　田中　惠一
バス停は里の臍なり草紅葉　田中　幸子
煮凝りに閉じ込められし日本海　田畑ヒロ子
湯治場の小さき朝市寒卵　田渕　令子
かまきりと化外の民になりにけり　佃　悦夫
緑裂き洒水の滝の一直線　出澤　洋子
記念樹の屋根まで届く夏椿　徳田　公子
月今宵宇宙の神秘垣間見る　豊田　幸枝
樟の大きな日影祭馬　鳥海　壮六
田の先の富士薄縹夕涼み　中田　笑子
口喧嘩する妻が居て冬薔薇　中津川晴江
アパートの灯火ゆらげる水田かな　中根　和子
少年の夢押し上げて冬の月　中根登美子
カーテンの中の孤独や青嵐　中野　文子
水仙花風の機嫌で開きけり　中村　昌男

年の賀や庭にボールの弾む音　小林　環
ドレミファソハモニカ鳴らし山笑う　下平　美子
厳しくも飲み屋の笑顔湘子の忌　鳥海　壮六
夭折の夫の書斎の淑気かな　杉崎　せつ
白梅や万葉歌碑の細き文字　古屋　徳男
寄鍋や時ゆたゆたと老夫婦　村場　十五

◆零（1・19）　史郎報

おでん酒娘その夫みな揃ひ　青木たけを
蹴破りて軍靴近づく雑煮かな　伊藤　道郎
リハビリの小さき窓に福寿草　井上　良子
雀の子もう一端（いっぱし）に羽根拡げ　川合　昌子
梅を見て淋しくなったから帰る　木村　和彦
相模湾天守よりみる初景色　佐藤　正子
樋（とい）の水飲むやぷるっと初雀　中村　裕子
四季それぞれもてなす春の花手水　野川木一路
ポインセチア赫々として過呼吸に　岡本　史郎

◆沈丁（1・19）　寶子山報

川下へ流る笹舟山眠る　若村　京子
またひとつ歳を重ねて老いの春　柳澤ミサ子
うかれ猫上よ下よと駅ホーム　田中　惠一
恋猫がロミオのやうに駆けあがる　河本　純子

十六のはじめての帯春の雪　中村　裕子
そう言えば恋だったかも草の花　中山　妙子
スタジアム喚声ラムネ発泡す　中山智津子
フグの糠漬け茶漬けで一飯加賀の秋　野川木一路
道草を唆さるる蝶の昼　陌間みどり
長き夜は亡き寂聴の恋談議　長谷川きよ志
聴診器当てらる梅の花ひらく　畠　梅乃
傍らに母が居るやう日向ぼこ　肥後ちさこ
生き方は引き算もよし風光る　廣田　悦子
花野吹く風となりしや去りし君　二上　光子
笑ひ合ふ気温三十五度の汗　二見　和江
初蝶や若さ引きだす畑仕事　古屋　德男
今日といふ日は直下型川とんぼ　寶子山京子
柔らかく開く手のひら苗木市　穂坂志げる
落葉焚く煙吸いこむ青い空　松下　俊之
水槽の金魚の尾鰭天女の舞　三木　泰子
結果待つ窓はふるえて青嵐　峯尾ユキエ
寒晴れや五ミリの飛行機富士に向く　蓑宮　わか
枯葎間合ひの言葉選びつつ　宮崎　悦女
鯛焼の温し月蝕さなかなり　村場　十五

梅三分隣家は固く閉ざされて　瀧本　敦子
老いるとはかういふ事か雑煮椀　勝木　澄子
箱根駅伝息吹く二日の城下町　菅野　英余
初春や客間狭しとはづむ声　高井　幸子
初御空杉あをあをと息を吐く　片野　節子
梅の香の主なき庭鳥集ひ　峯尾ユキエ
恋猫や軒下走るすさまじさ　河本チヨ子
猫とねこ恋の邪魔せず遠回り　清水美代子
春時雨雫となりて去りぬ父　松下　俊之
犬抱き最期の夜の桜月　武居裕美子
笹鳴や枕の下にワン・コイン　寶子山京子

◆草むら（1・20）　重満報

寒晴を切り取る嶺の刃かな　石井　秀稀
移り住みし何処も故郷卒寿春　井上　和子
顔洗う銀河の一滴入れてけり　佃　悦夫
存分に呑む丹沢の初御空　佐々木重満

◆無所属

梅二月待たずに友は星となり　小林永以子
到着の寝台列車雪匂ふ　畠　梅乃
枯れすすき時に遊び場獣道　蓑宮　わか
初湯殿昨日と変わらぬ人入る　岩楯惠津子

田に合はす有給休暇明易し　百川　秀子
さるすべり心のだるさ尾を引いて　守屋　まち
沈む夕日今真つ直ぐに秋の海　柳澤ミサ子
故里の余白を埋めて稲穂立つ　山口　千代
幾度の出会ひと別れ春夕焼　山崎　悦子
巣燕に開けつぱなしの土間の窓　山崎美知子
待つとなく忘るるとなく十三夜　山田　照子
売子さんレジ袋より福袋　山本　すみ
散りしきる落葉かなしや瞽女（ごぜ）の墓　湯本とし子
汗の子の開くこぶしにだんご虫　横塚　昌平
海見ゆるベンチでランチ風五月　吉田　百代
神杉のすつくと伸びて天高し　吉田　康雄
うつすらと少年のひげ毛虫焼く　米山　翠
若葉風スローダンスを舞ひにけり　來田　新子
あたふたとなる婆の杖夏休み　若村　京子
百合匂う眼科医院の暗さかな　和田恵美子

（以上一五四名）

生き上手ここにも見たり返り花　木村美千代
山城の落葉に埋もる曲輪跡　一ノ瀬茂代
冬夕焼ブラスバンドの良き響　出澤　洋子
仰向けとうつ伏せ霜降りにけり　瀬戸　正洋
かいつぶり二羽いてにんげんも二羽いる　大石　雄介
アメイジンググレイス野芝を滑る幼児たち　大石　和子
猛吹雪愛情ノイズぶちまける　穂坂志げる
緋のドレスととのへイブの四重奏　須田　聡子
二日はや芥の煙畑中に　山田　照子
猪食うた報ひ眼鏡のくもりをり　小島ノブヨシ
マスクして嘘を半分隠しけり　小澤　園子
マニュアルに添はぬ足取り雪女　北村　文江
何事もなき日繭玉ほのと揺れ　杉山あけみ
どんど火を囲みて地区の顔役ら　青木　勝子
釣人が冬のうららを袈裟斬りす　田畑ヒロ子
水仙のSweet Smell, Snowy　柴田　礼子
幼児の巻いてくずれて独楽の紐　岡田　典代
領空も領域もなく鰤起し　山口　千代
和を願う青黄の電飾冬並木　木村予史重
はや十日尻上ぐ媚態浮かれ猫　大佐田うづき

内田知江子

（令和4年11月号）

わが影に道せかさるる秋の暮　　池田忠山

秋の夕暮の影は濃く長く己が影でありながら時には圧迫を感じる程です。

落日すれば一変し、風も冷ややかとなり、一日の短かさと秋の深まりを思い知らされます。「道せかさるる」に至るまでの時をいろいろと想像させられ味わい深い句と思いました。

（令和4年12月号）

玉入れは空のポケット運動会　　加藤健治

空から見下ろせば玉入れの籠は小さな小さなポケット。でも地上の子供達には楽しいポケット。子供達が投げ入れする姿や籠に向かって宙を絶えず躍動する赤白の玉、声援する人々の声、それ等が一体となり運動会の大いなる盛り上りが目に見える様です。

投げ入れの「籠」を「空のポケット」とした見立てが新鮮です。

小林　環

（令和4年11月号）

金髪でピアスの男の子稲架を組み　　秋山　昇

日本の農業は後継者不足が危惧されている。我家を含め、近所の農家も高齢者ばかりで、稲刈の時に若い人の姿はほとんどない。そんな中、掲句は、若い男子が稲架を組み、稲刈をしている。金髪、ピアスも結構、ファッション感覚溢れる若者の姿が眩しい。農業の分野にもそういう若者がいてくれることは、日本の未来が有望。日本の美味しい米を、若者が作り継いでくれる期待が高まった。

（令和4年12月号）

天高し庭師の開ける空がある　　市川めぐみ

庭師が、伸び放題の枝を下ろし、形を整えて、すっきりしてくれる。思いもよらぬ庭の広さと明るさ、そして、空の広さに感動した経験がある。この句で、その時の思いが蘇った。小さい発見かも知れないが、その変化を「庭師の開ける空」と表現されたところが巧みで新しい。天高しの季語で、晴れわたった大きな空が印象的な表現となった。

陌間みどり

（令和4年11月号）

黒葡萄食みゐて企むこともなし　瀬戸　悠

黒葡萄を通して人の深層に迫ってくる句です。「企むこともなし」と企むことを否定しながら却って企むことより恐い何かを暗示しています。まるで心理サスペンス小説のようです。黒葡萄の持つ神秘性や甘美なイメージが十分に生かされているからでしょう。短いが故に説明を省く俳句ですが、その表現の奥深さや多様な可能性をこの作品から教えていただき共感をしました。

（令和4年12月号）

千の枝伸ばす神木冬夕焼　寶子山京子

寒さや暮れの早さからか冬は夕焼を見る機会が少ないような気がします。

掲句は夕焼に染まった神木の姿とも、夕焼を背に黒々とした神木のシルエットとも読みとれますが、私は冷気と美しい夕焼の中に浮かび上がった神社の杜の立派な神木のシルエットと鑑賞しました。橙色、金色の夕焼と神木の影とのコントラストの壮厳さに共感を覚えました。無駄のない表現に敬服です。

中根登美子

（令和4年11月号）

秋吟行声の飛び交う浜生句碑　高橋みどり

十四年前建立した句碑の周辺を吟行。当時を知らない人も、おほゐ俳句会を創設した指導者の野村浜生先生の話に盛り上がる。

辺りに落ちた木の実を句碑に並べたり、子どもの様にはしゃぐ様子が伝わって来る。

その日先生が満百歳の生涯を終えられた事を後日に知る。何かに導かれての吟行だったのでしょうか。

◆お詫びして訂正します◆

666号　3頁池田忠山さんの句

（誤）境内の伽藍といはず冬の日向

（正）境内の伽藍といはず冬日向

8頁　新作5句作者名

（誤）若林京子 →（正）若村京子

新規の加入者について、各グループ代表又は総務部長（佐々木重満　☎〇八〇ー一二四七ー八八七八）へお申し出ください。

第76回小田原桜まつり俳句大会

第一部　作品募集

兼　題　「桜又は花」「猫の恋」（いずれも傍題可）
　　各一句一組
　　未発表作品に限る
締　切　令和五年二月十七日（金）必着
整理費　一組に付き千円（句稿に同封、何組でも可）
投句先　〒250-0111 南足柄市竹松一四六三ー七
　　加藤かほる宛　〇四六五ー七四ー五〇六二
　　＊作品は原稿どおり印刷します。
選　者　協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）
賞　　県知事賞以下二十位まで　選者特選賞六人

第二部　俳句大会

日　時　令和五年四月二日（日）
会　場　小田原市民交流センター（ＵＭＥＣＯ）
受　付　十一時　投句締切：十二時　開会：十二時半
整理費　五百円（呈飲料）
席　題　春季雑詠二句　総互選
賞　　市長賞以下五十位まで　参加賞
（主催）小田原市観光協会（主管）小田原俳句協会
（後援）各地俳句協会
＊会場は現在のところ飲食可能ですがなるべく各自、食事を済ませてご参集ください。マスク着用など感染症防止対策は継続します。入口で検温して下さい。

小田原俳句協会　〒二五〇ー〇〇一二　小田原市本町二ー一三ー二　池田　忠山方

新作５句

坂入清四郎

富士白く足柄の空飾りけり
冬木立柿の実二つしっかりと
お峰入りユネスコに迄入りにけり
小寒や老の身にも息白し
カラ松に二羽の小鳥寒々と

柴田　礼子

冬の蝶ラストフライトｘｙｚ（エクスワイジー）
肩を出す服は賛成夏ならば
冬の雨おやすみバンクシー傘の女
トー横の正月がいい女の子
難民のごと時雨ゐる風しなる

高橋みどり

煌めきぬ踏まずにおこう霜柱
葱刻む音に囃されうどん店
白梅や夕日集めて香の仄か
身の丈のこのままが良し去年今年
無病願う飲み干す水の寒九かな

峯尾ユキエ

せち料理ずらつと並べ子らを待つ
初髪や鏡の中が異次元に
左義長の炎の向かふゆらぐ君
春隣正座の膝に五指揃へ
足柄の空に吸はれし凧もどす